

第二目 我海軍ニ於ケル保式魚雷ノ發達

第一、自二十七、八年戰役至三十七、八年戰役

既記ノ如ク二十八年十二月ヲ以テ自今保式魚雷ヲ我海軍ニ採用ノ件ヲ定メシガ次テ三十年末軍艦富士、八島二艦ノ着那ニ依リ茲ニ始メテ四十五糎魚雷ヲ見ルニ至リシモノニシテ三〇式魚雷ト稱セララルモノ即チ之ナリ今先ニ二十六年軍艦吉野輸入ノ二六式魚雷ト三〇式魚雷トノ主要要目ヲ左記シ參考ニ供ス蓋シ今日トハ正ニ隔世ノ感アルベキナリ

要目		水雷別	水雷	水雷
實用ピストルヲ用ヒタルトキノ全長			十四吋(三十六糎)	十八吋(四十五糎)
九〇氣壓裝氣發射準備セシトキノ總重量			一五呎	五米
有効距離			六〇〇米(仙)	五三二呎
有効距離内平均速度			二六節	八〇〇米
氣室全長			五呎六吋	二七節
				一九六〇耗

裝藥量	(水分百分) 十七含有	五二斤	九七、四斤
導火藥平均量	一磅		四〇〇瓦
頭部全重量	一五四磅		一三四、五斤

爾後十四吋(三十六種)魚雷ニ在リテハ發停裝置及調和器ヲ改造シ至裝氣壓力ヲ一〇〇氣壓、全長一五呎、裝氣量五〇斤ノ三三式ヲ十八吋(四十五種)魚雷ニアリテハ裝氣量一〇〇氣壓、裝藥量九〇斤ノ三三式魚雷ヲ見ルニ至レリ而シテ三十七、八年戰役ニ用ヒシ保式魚雷ハ實ニ之等三三式及其ノ以前ノ舊式魚雷タリシモノナリ之ヨリ先キ我國ニ於テ魚雷ヲ海防用ニ充ツルノ有利ナルヲ認メ二十七、八年戰役ニ於テ一部ノ實現ヲ見シガ(第五編第三章參照)戰後明治三十年夏季海軍大尉山下源太郎海軍大機關士大館源太郎渡英(造兵監督官)シ大館大機關士ハ間モ無ク埃國ニ出張シ專ラ同國保社ニ於テ我政府ノ註文ニ係ル魚形水雷製造ノ監督ニ從事セシガ當初我政府ノ註文ニ係ル二百七十有餘個ノ海防用水雷ハ其ノ制式普通艦船用十八吋魚形水雷トモ異ルコトナク其ノ有効距離僅ニ八百米ニ過ギザルヲ以テ頗ル之ヲ遺憾トシ屢々計畫變更ノ意見ヲ提出セリ當時埃國政府ニ於テ海岸防禦用トシテ直徑十八吋長サ六米ノ魚形水雷ヲ試製セシニ其ノ有効距離二千米ニシテ其ノ速力二十三節ヲ得タリ又英國政府ニ於テモ直徑二十四吋長サ五米ノ海防用魚形水雷製造ニ着手中ナリシガ當局ニ於テハ大館機關大尉ノ意見ヲ

酌シ海防用魚形水雷トシテ速力二十七海里以上有効距離二千米以上ノモノヲ計畫製造スベク訓令セリ爾後新海防水雷(三四式魚雷)創製ニ至ル經過ハ明治三十五年三月海軍大臣ヨリ内閣總理大臣宛提出ノ左記特別敍勳上奏文ニ見ルガ如シ

海軍機關中佐 大 館 源 太 郎

右者竊ニ造兵造船監督官トシテ埃國ニ出張シ専ラ同國保社ニテ我政府ノ註文ニ係ル魚形水雷製造ノ監督ニ從事セシガ其ノ際我政府ヨリ保社ニ海防用魚形水雷ヲ註文シ有効距離二千米速力二十七海里以上トナスベキ旨ノ訓令ヲ授ケタルニヨリ同官ハ保社ニ交渉シ該社ノ圖案ニ基キ其ノ筋ノ認可ヲ經テ直徑二十八吋長サ五米ノ一水雷ヲ試製セシメタルニ其ノ試驗結果豫期ニ反シ到底實用ニ適セザルノミナラズ保社ハ我政府ノ要望ヲ滿スベキ魚形水雷ヲ製出シ能ハザル旨申出テタリ茲ニ於テ同官ハ如何ニモシテ我政府ノ要望ヲ滿サント欲シ刻苦奮勵自ラ意匠ヲ凝ラシ埃國海防水雷ノ計畫ニ基キ一水雷ヲ案出セリ埃國海防水雷ハ氣壓百、裝藥量七十瓦、平均速力二十六海里、有効距離二千米ナルモ同官ノ計畫ニ係ルモノハ氣壓百五十、裝藥量七十五瓦、有効距離三千米、平均速力二十六海里、距離二千米ノトキ速力三十海里ニシテ我政府ノ要望スルトコロノ二千米ノ距離二十七海里ヲ得タルヲ以テ我海軍ニ採用スルニ至レリ今ヤ帝國ガ列國ニ先テ最モ有力ナル斯種ノ水雷ヲ備フルニ至リシハ全く同官ノ苦心精勵ノ致ストコロニシテ我海軍ニ裨益ヲ與フル實ニ偉大ナルモノナリ其ノ功績顯著ナリト認ム仍テ叙勳四等授旭日小綬章金五百圓ヲ下賜セラレ度及上奏候也

海軍機關中佐 伊 達 只 吉

右者大領海軍機關中監ノ創意ニ係ル海防用魚形水雷ノ我海軍ニ裨益ヲ與フル偉大ナルモ製造成ルニ及ンテ轉職セシヲ以テ茲ニ造船造兵監督官トシテ其ノ後ヲ繼ギ埃國ニ出張シテ該水雷ノ試驗ニ從事セリ該計畫ハ學理上遺算無シト雖實驗ノ場合ニ到リテ尙改良スベキ點ヲ發見セルヲ以テ發射試驗ヲ行フコト百數十回其ノ間種々ノ困難ヲ排シ改良ヲ加ヘタルモノ即チ「ピストンロッド」ノ屈曲セザランコトヲ講ジ或ハ「ピアリング」ノ過熱及「シリシター」ノ龜裂ヲ防ギ、縱舵機ノ附着位置ヲ變更シ又縱舵機ノ面積ヲ增大シ或ハ潤滑油分離器ヲ裝置シ其ノ他各部ニ改良等ヲ企圖シ幾多ノ實驗ヲ積ミ遂ニ大領機關中監創製ノ海防用魚形水雷ヲシテ完全無缺

ニ至ラシメタル共ノ功績顯著ナリト認ム仍テ双光旭日章並ニ金貳百五十拾圓ヲ授賜セラレ度及上奏候也

即チ本魚雷ハ大館中監ノ創作ニ加フルニ伊達中監ノ助成ニ就ルモノニシテ二十六年初頭着邦シ同年秋季實施部隊ニ供給ヲ見ルニ至レルモノナリ

因ニ記ス海防用魚雷トシテノ大型魚雷ノ提案試製並ニ之ガ廢棄ニ關シ造兵中將種子田右八郎ノ語ルトコロ左ノ如シ

一、明治三十年夏山下大尉及大館大機關士ノ兩名造兵監督官トシテ渡英シ小生ノ監督事務ヲ引繼グコトナレリ

二、兩氏ハ新ニ魚雷多數ノ註文訓令ヲ受ケ居リ内普通十八吋五米魚雷二百七十本ハ海防用ナリト記憶ス、當時ハ英國ニ海防水雷ナルモノ無カリシガ如ク從ツテ之ガ調査ヲ爲セシコトナシ

三、之ヨリ先キ明治二十八年頃「フューメー」保社ニ於テ一層高氣壓(三百氣壓)ノ空氣ヲ魚雷ニ使用セント試ミ十四吋魚雷ノ圓筒氣室ニ代フルニ小徑管多數ヲ裝飾シタル薄鋼板製圓筒形氣蓄器ヲ取附ケ實驗シタルコトアリ勿論本型式ニハ減壓弁ノ計畫ニ困難ヲ免レザルモ他日發展ノ見込アルモノトシテ勤カラズ専門家ノ注意ヲ惹ケリ

四、今回註文ノ海防用水雷ニハ右ノ管型氣蓄器ヲ用ヒ從來ト全然異レル特種魚雷ヲ保社ニ計畫セシムルヲ利益ト考ヘ兩氏ニ提案セシニ何レモ賛成セシガ當時恰モ「フューメー」保社長「ジョーン」氏來英中ナリシカバ同氏ヲ倫敦ニ招キ山下、大館、種子田ノ四人ニテ熟議ノ結果「ジョーン」氏ハ二十四吋或ハ以上ノ直徑トセバ成功ノ見込アリト提案セルヲ以テ遂ニ此ノ種魚雷ノ註文ヲ發スルコトトナレリ斯クテ小生ハ三十年十二月歸朝セリ

五、爾來「フューメー」保社ニテ計畫ノ上種々研究實驗ヲ行ヒ二十八吋魚雷迄計畫セシモ豫期セザル困難續出シ遂ニ成功セズ失敗ニ終レリ乃チ已ムナク在來ノ十八吋五米魚雷ノ氣室ヲ一米半延長シ且氣壓ヲ高メ以テ或程度迄射程距離ヲ増加シ之ヲ海防水雷トシテ我海軍ニ採用スルコトトナリシモノニテ山下、大館兩氏ノ渡英ヨリ本魚雷ノ實現迄比較的長時日ヲ要セシハ叙上ノ經緯ニ因

ルモノナリ

二四九

此ノ間吳工廠魚雷工場ニ於ケル魚雷製造ノ狀況ヲ見ルニ左ノ如シ

- 一、明治二十九年八月保式十四吋(三十六糎)魚雷(二六式)ノ製作ニ着手シ同三十年六月完成ス試射ノ結果良好ナリ之レ當工場ニ於ケル魚雷製造ノ嚆矢ナリ而シテ又實ニ帝國海軍ニ於ケル魚雷製造ノ濫觴ナリ(朱式ヲ試製セシハ前述ノ如シ)
- 二、明治三十四年九月ヨリ三二式魚雷ノ製造ヲ始ム
- 三、三十六年百五十氣壓、五米魚雷ノ計畫試製ヲナシ同年十二月共ノ一個ヲ完成ス其ノ要目左ノ如シ

全長	一直	徑	裝氣量	炸藥量	全重量	能	力
五米	四十五糎	一五〇氣壓	九〇斤	六一七斤	二〇〇〇米二十八節(實射)		

(註)氣室ハ吳製特別鋼材「ニツケル」鋼ヲ用ヒタリ

以上各種ヲ通シ海軍技師坂東喜八ノ研究努力ニ負フ處多シ尙前記三ト共ニ坂東技師ハ裝藥量一〇〇斤一五〇氣壓水雷ヲ計畫セシガ本魚雷ハ後記ノ三八式一號魚雷製造ノ基礎ヲ爲セルモノナリ

本期間半バニ於テ魚雷遠距離發射裝置即チ甲種水雷ヲ採用シ軍艦魚雷ノ活用上特筆スベキ一進運ヲ劃シタリ三十三年夏秋ノ候行ハレタル基本的發射試驗成績概要(魚雷改造事項共)等左ノ如シ

遠距離魚形水雷發射試驗成績表

- 一、本成績表ハ長浦工場「ボンツーン」及驅逐艦雷、電、曙、隼等ヨリ數十回ノ試驗ヲ爲シ改良修補ノ未遂ニ遠距離發射ニ對シ適當ノ水雷調整法ヲ發見セシモノナリ而シテ改良ノ重ナルモノヲ擧グレバ左ノ如シ
- (一) 調和器用彈子ハ遠距離發射用特別彈子ヲ適川シタルコト

(二) 距離車齒數ヲ三千米ニ増加シタルコト

(三) 今回遠距離發射ノ爲不圖モ從來ノ「克蘭ク、プラス」注油裝置ハ其ノ注油管徑大ニ過ギ普通發射ニ於テ二〇〇〇米ニ達スル頃已ニ全油ヲ消費シ其ノ殘距離十八吋ニテハ六〇〇米、十四吋ニテハ四〇〇米間注油セズシテ走出シ徒ニ此ノ注油孔ヨリ空氣ヲ放出空費シ且ツ「克蘭ク、プラス」ヲ燒クコト、但シ普通水雷發射ニテ燒方甚シカラザルモ遠距離ニ於テハ有害ナル結果ヲ生ズルコトヲ發見セリ故ニ其ノ油孔ヲ適良ニ改正セシニ其結果ヲ得タルコト

以上ハ種子田機關中監(右八郎)ノ監理ノ下ニ爲サレタル改造ノ主ナルモノナルモ其ノ他多少ノ修補ト發射上注意スベキ點數多ヲ實驗セリ左ニ終局ノ目的ヲ達シタル遠距離發射成績表ヲ示ス

遠距離魚形水雷發射成績表

斜 偏	水 雷 種 類		十 八 吋		十 四 吋	
	左	右	發 射 距 離	時 間	發 射 距 離	時 間
	一〇		三〇〇〇	六分三秒	二五〇〇	四、五八
		五〇	三〇〇〇	一四、八一	二四〇〇	一五、八五
			三〇〇〇	六、三四	二四〇〇	四、五四
	五〇	〇	三〇〇〇	一四、七八	二四〇〇	四、五八
		五〇	三〇〇〇	一五、一三	二四〇〇	四、五八
		五五	三〇〇〇	六、二五	二四〇〇	四、五八
			二五〇〇	五、四八	二四〇〇	四、五四
	三二		二五〇〇	一三、九五	二四〇〇	四、五四
		一五〇	二四〇〇	一五、六四	二四〇〇	四、五四
		一〇〇	二四〇〇	一五、八五	二四〇〇	四、五四

(註)遠距離發射ヲナスベキ水雷ノ裝氣ニハ時間ヲ置キ三回程ニ裝氣シタル九〇若クハ一回ニ裝氣スル際ニハ九三氣壓ニスルヲ
必要トズ

遠距離魚雷(甲種水雷)ノ淵源等ニ就テハ第四編第四章ニ詳述シアリ